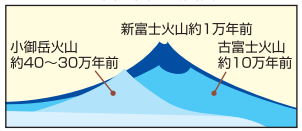
富士山のおいたち

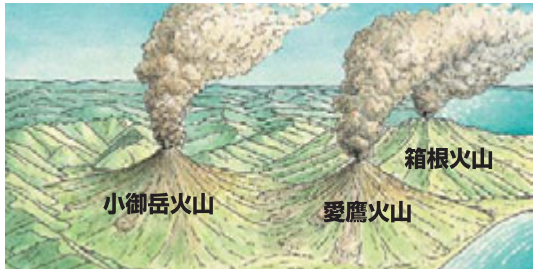
富士山は、富士箱根伊豆国立公園の一部に指定されており、美しい円錐形の山容は、古来から多くの人々を魅了し、広大な裾野は、私たちに多くの恵みを与えてくれています。

しかし、その富士山は、はるか昔からくりかえされた噴火によってできたものです。つまり火山の恵みと災害とは表裏一体の関係にあるのです。

富士山の断面図

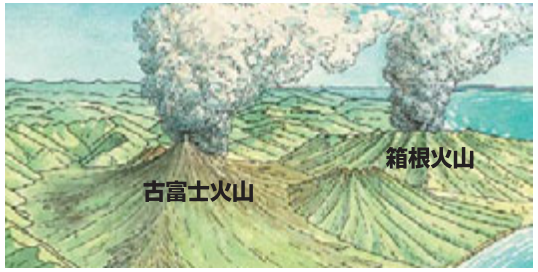


1 小御岳火山の時代



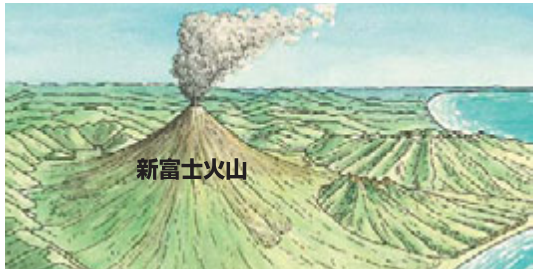
今から約40～30万年前、現在の富士山よりやや北側に「小御岳火山」が誕生しました。現在の富士吉田登山口５合目の小御岳神社付近がその頂上にあたります。

2 古富士火山の時代



約10万年前になると、小御岳火山中腹で爆発的な噴火が繰り返して起きました。少なくとも５回の山体崩壊を発生させ「古富士火山」ができました。

3 新富士火山の時代



約１万年前になると、古富士火山を覆うように「新富士火山」が噴火により多量の溶岩を流出し、現在の富士山の形にまで成長しました。

富士砂防事務所の概要

国民の安全を守るため、富士砂防事務所では次の３つの事業を実施しています。

富士山がわかる

富士砂防事務所では、次の場所で富士山に関する情報を提供しています。

道の駅 富士川楽座

フジヤマビューギャラリー
〒421-3305
静岡県庵原郡富士川町岩渕1488-1
TEL 0545-81-5555
www.fujikawarakuza.co.jp/

道の駅 朝霧高原

〒418-0101
静岡県富士宮市根原字宝山492-14
TEL 0544-52-2230
www.asagiri-kogen.com/

いやしの里根場　砂防館

2006年9月グランドオープン予定
お問合せ先
富士河口湖町観光課
TEL 0555-72-3168

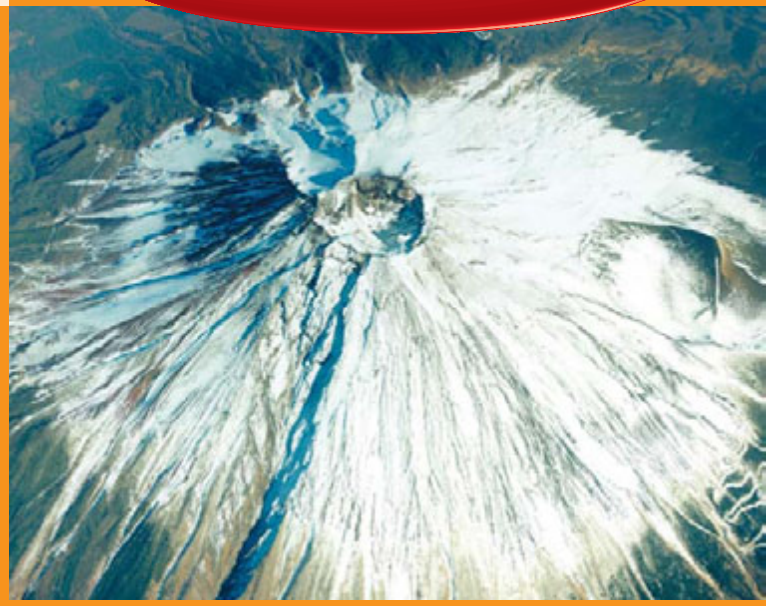
西湖 コウモリ穴

〒401-0334
山梨県南都留郡富士河口湖町西湖2068
TEL 0555-82-3111

発行者　国土交通省中部地方整備局
富士砂防事務所
〒418-0004　静岡県富士宮市三園平1100
TEL 0544-27-5221
E-mail：fujisabo@cbr.mlit.go.jp
HP:http：//www.cbr.mlit.go.jp/fujisabo/
初版発行日：平成18年3月10日

「Radio-ｆ」（84.4MHｚ）にて毎週水曜日17:10頃から５分間、「富士砂防事務所インフォメーション」を放送中（主な受信エリアは富士市、富士宮市、富士川町、芝川町です。）

富士山火山防災豆知識



富士山は、今から約300年前の江戸時代に噴火した（宝永噴火）後、現在まで噴火活動はなく静かな状態が続いています。しかし、地下深くでは今もマグマが活動を続けている「活火山」です。

そのため、万が一噴火が始まった時にどのような現象があるか？影響範囲はどこか？また富士砂防事務所が噴火現象に対してどのような対応を考えているのかをお知らせします。

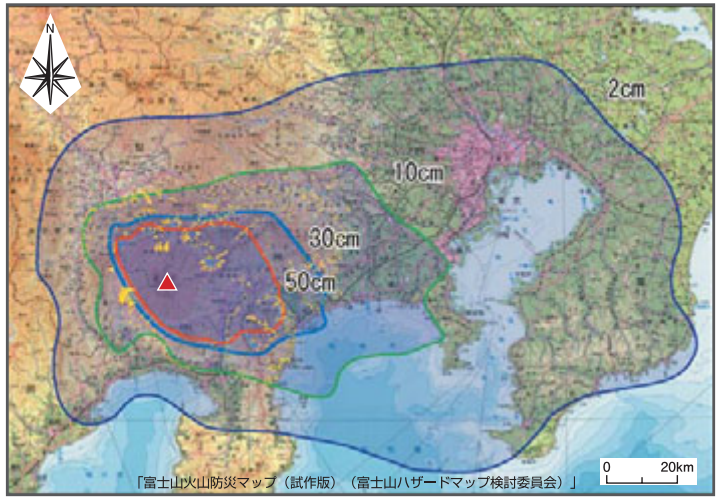
富士山の歴史時代の主な火山活動

西暦年代	活動の種類	古記録の記載事項（抜粋）
781年	噴火	山麓に降灰し、木の葉が枯れた（続日本紀）
800～802年	延暦（えんりゃく）噴火	砕石が足柄路を塞いだので箱根路を開いた（日本紀略）
864～866年	貞観（じょうがん）噴火	溶岩流が本栖湖と剗（せ）の海に流れ込んだ（日本三代実録）
937年	噴火	溶岩流が未知の湖を埋めた（日本紀略など）
999年	噴火	噴火（本朝世紀）
1020年	噴気と火映現象	山頂から煙が立ちのぼり、夜には炎が見えた（更級日記）
1033年	噴火	溶岩流が山麓に達した（日本紀略）
1083年	噴火	爆発的な噴火（扶桑略記など）
1435年	噴火	富士山に炎が見えた（王代記）
1511年	噴火	河口湖付近で異様な鳴動が聞こえ、鎌岩が燃えた（妙法寺記）
1704年	鳴動	元禄関東地震の35日後から4日間にわたって富士山が鳴った（太泉寺文書）
1707年	宝永（ほうえい）噴火	宝永東海地震の49日後から2週間にわたって爆発的な噴火が生じた（史料多数）

富士山火山防災マップについて

「富士山ハザードマップ検討委員会」では、過去の現象や近年の他火山の災害事例をもとに、広域的な防災対策の基礎となる「富士山火山防災マップ（試作版）」を公表しました。下の図は、その一部です。この試作版を使って富士山周辺の自治体は、それぞれに詳細な火山防災マップを作成し、住民に配布しています。

この火山防災マップで「どこが危険な場所か」、「どこが安全な場所か」を事前に確認しておきましょう。



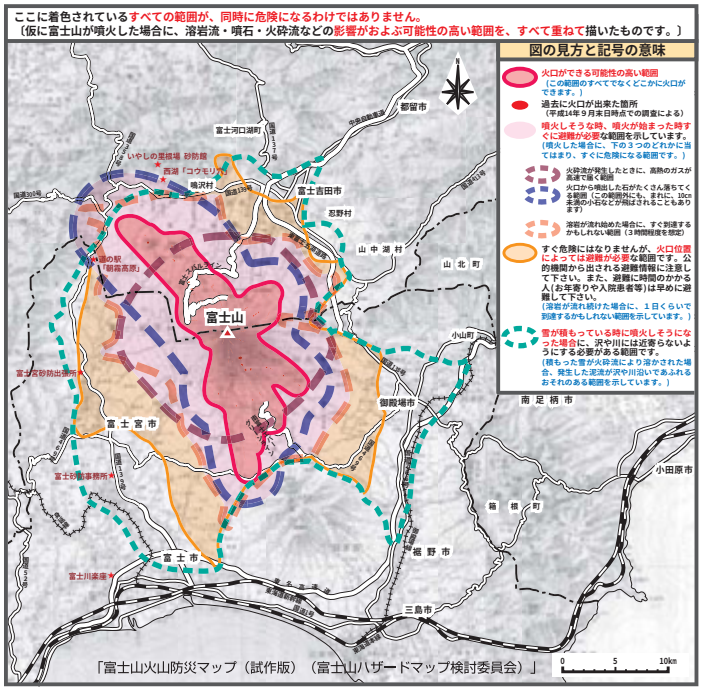
火山灰や軽石を出す大規模噴火の場合の想定降灰深と到達範囲

上図は、富士山が噴火した場合の火山灰の想定降灰深と到達可能範囲を示したものです。ただし噴火の規模及び風向きによる影響で、降灰深と到達範囲は変わるため、この図で示された枠外にも降灰が到達する可能性はあります。西暦1707年の宝永噴火では、「江戸でも地震がひどく、雷のような音が響き、火山灰が地面を覆い、草も木も真っ白になっている。降灰のため日中でも暗く、明かりをつけなければ本もよめない」と当時の学者　新井白石が記すほど遠くにまで火山灰の影響が及びました。

図の見方

降灰の堆積する範囲

- 50cm以上
- 30～50cm
- 10～30cm
- 2～10cm
- 土石流到達範囲



上図は富士山において「火口ができる可能性のある範囲」及び噴火した時に「溶岩流・噴石・火砕流などの影響が及ぶ可能性のある範囲」を重ねて示したものです。

噴火前に火口の正確な位置を特定することは困難ですが、図で示した範囲のどこかにできると予想されています。

また噴火した場合には火口の位置により、図に示した範囲に影響が及ぶ恐れがあると予想されています。

（想定された範囲全てに同時に影響が及ぶというわけではありません。）

富士山の噴火対策について

富士砂防事務所では、富士山の噴火現象に対して、「ハード対策」と「ソフト対策」を実施します。

「ハード対策」とは、砂防施設を配置し、噴火による被害を最小限とする対策のことです。

ハード対策は、皆さんの家や財産を守るためにも、また避難のための安全な場所を確保するためにも大変効果的ですし、溶岩流等の流下をコントロールし、避難する時間をできるだけ長くかせぐことも可能です。

現在、富士砂防事務所では、富士山において広範囲に多大な被害が起きる可能性が高いと想定される「溶岩流」、「融雪型火山泥流」、「降灰後の土石流」の３つの噴火現象に対して、ハード対策を検討しています。

一方、「ソフト対策」とは、富士山の噴火と土砂災害について皆さんに知ってもらうための広報活動を行うことや、各関係機関が富士山に関する情報を共有するためのシステムなどを整備するものです。

富士砂防事務所では、富士山の噴火現象をとらえるための監視施設を設置し、他の機関の観測施設等との共有を図り、地域一体となった火山防災情報網を整備していきます。

光ケーブル網を利用した火山監視カメラ

富士砂防事務所では右の３つの噴火現象への対策を検討しています

溶岩流

火山噴火に伴って地下のマグマが地表に出てきて、山を流れくだる現象。

融雪型火山泥流

火砕流の流下範囲に積雪があった場合に、火砕流の熱でその雪が融かされ泥流を発生させる現象。

降灰後の土石流

火山噴火によって山に火山灰が降り積もったあとで雨が降り、火山灰が流れ出し、岩や土砂を巻き込んで流下する現象。